2022.11.21

2022年度岡本ゼミによるオンライン・フィールドワーク（FW）の成果報告

政策学部岡本由美子ゼミは2011年度以降、ゼミ活動の中心に海外フィールドワーク（FW）を据えて来ました。今年度は、開始以来、12年目になります。新型コロナウイルスの影響で今年度もまた、オンラインでの海外FWを余儀なくされましたが、その成果報告会は、ようやく、オンラインではなく、ハイブリッド方式で開催することができました。2022年度10月29日（土）の午後3時から午後5時半まで、新町キャンパス臨光館201号室で開催致しましたので、以下、その概要をまとめます。

冒頭、岡本より、ゼミのテーマ、特徴、及び、今年度のゼミ活動の概要を説明した後、３つの班（NUFLIP班、コーヒー班、エコツーリズム班）からそれぞれ、20分ずつ、成果報告の発表を行いました（当日のスケジュールに関しては、文書の最後の補足欄を参照して下さい)。最初の報告はNUFLIP班からでした。ウガンダ政府に日本政府から供与されているODAの中でも2020年度、外部から非常に高い評価を受けた北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト（NUFLIP）のプロジェクト事後評価を行いました。2021年度の海外FWの際、マケレレ大学のAsiimwe教授から、ODAの一般の問題として、プロジェクト終了後はプロジェクトに参加していた人々の意識や行動が元に戻ってしまう傾向にある、ことが指摘されました。つまり、ODAの効果は持続しないのではないか、という、大変、ショッキングな問題提起がなされました。岡本ゼミとしては、NUFLIP フェーズIのその後が大変気にかかっていました。株式会社JINの協力を得て、NUFLIP フェーズIのみ参加した農家さんが、その後、どのようになっているのか、調査を行ってもらいました。我々の想像以上に効果が持続していて、非常に驚きました。また、ODAのプロジェクトの効果が持続しているかどうかは、参加者全員がプロジェクトのコンセプトをどこまで理解しているのか、にかかっているのではないか、という結論に至りました。今年（2022年）の海外FWで、マケレレ大学のAsiimwe教授にもその点をご納得いただき、大変にうれしかったです。マケレレ大学の教員や学生さんとも、ようやく、興味関心分野が一致し、関係も少しずつ深まっています。これもまた、海外FWの何よりの成果でありました。

報告会2番目の発表は、コーヒー班からでした。コーヒー班は今年5月に山下里愛氏から受けたPCM研修の成果を最大限活かすべく、BOFAのステークホルダー分析から始めました。今年度はBOFAの女性コーヒー農家さんをプロジェクト受益者に据え、問題分析を行いました。その中で、今年は女性コーヒー農家さんの経済的なwell-beingの低さに焦点を当て、その原因を探りました。その結果、品質がよくても十分それを活かしたマーケ

ティングができていないこと、及び、副収入を得るために開始したハンディクラフトセンターが十分に機能していないことを突き止め、その解決策として、２つのことを行いました。１つ目は、女性コーヒー農家さんのコーヒー販売増加に繋がるようなパンフレット作成です。2 つ目は、昨年、品質の問題で日本の市場で販売できなかった蜜蝋ラップ（ハンディクラフト製品）の KAIZEN に取り組みました。パンフレットはほぼ完成していたのですが、今年の 7 月終わりにこの組合と農家さんが位置する東部ウガンダが大洪水に見舞われた影響で、コーヒーの木にも大きな被害が出ました。その結果、女性コーヒー農家さんのコーヒー豆の日本での販売ができず、かつ、蜜蝋ラップ作成に必要な材料も現地で調達できない事態が起きてしまい、ゼミ活動を予定通り行うことはできませんでした。ただし、今年の COP27 の大きなテーマでもある、気候変動による「Loss and Damage」の重要性はとりわけ途上国にとっては大きいことを我々は思い知ることになりました。また、ゼミをあげて募金活動を行い、現地組合にあるまとまった金額を送金できたことは良かったと思います。

最後に、エコツーリズ班が発表を行いました。エコツーリズム班は、現地の環境保全団体であるマバンバ湿地エコツーリズム協会（MWETA）という NGO と連絡を取り合いながら、コロナによって激減してしまった観光客を取り戻し、さらに収入をどのように増やすことができるのか、色々な方策を考えました。今回は、デジタル面とアナログ面から、共に攻めていきました。ゼミ生自身は色々なアイデアを現地 NGO に提案しましたが、残念ながら、以前、この NGO に勤務していてデジタル面に明るかった若手のホープが本団体の主な活動から手を引いてしまい、現地 NGO とのデジタル面でのコミュニケーションがうまくとれませんでした。一方、アナログ面では、エコツーリズム推進に役立つようなパンフレット作成に従事しました。JICA ウガンダ事務所等、現地の日本関係団体に置いてもらうのはどうか、というような提案もいただき、来年、交渉をしたいと考えております。

2022 年度は 4 名の国際開発、又は、ソーシャルビジネスの専門家の方々にコメントをお願いしました。株式会社 JIN 事業部長で開発コンサルタントの山下里愛氏、JICA アフリカ部アフリカ第二課の宮川聖史氏、Be Think Partner 代表の金田真由子氏、そして、同志社大学政策学部 PBL 推進室の滝本香菜子氏です。3 つの班の報告後、この 4 名の専門家の方々から、コメントを頂きました。

大変好意的なコメントを頂けた一方、様々な改善点の提案もいただきました。NUFLIP 班に対してですが、プロジェクトの事後調査結果があまりにもよく、サンプルの選び方がどうであったのか、という指摘もありました。これは今後の課題の一つであると思います。ただし、NUFLIP フェーズ I によってとりわけ、ジェンダー問題がすべてではないにしろ解決に向かい、家族のしあわせがこの地域で取り戻せて、かつ、その効果が持続している様子がうかがわれ、素晴らしいとのコメントが多かったです。

コーヒー班ですが、提案に至るまでの分析プロセスがしっかりとしていて、わかりやす

かったとのコメントをいただいた一方、何故、蜜蝋ラップを現地女性コーヒー農家さんが今回、製作できないと言ってきたのか、もう少し、その原因を詰めて考えてみる必要があるのではないか、との指摘もありました。コーヒーの木の被害が出て、女性コーヒー農家さんだけの生豆の出荷ができないのは理解できますが、蜜蝋ラップの原料の不足というのは少々、理解ができないという意見もありました。本音がどこにあったのかも含めて、ハンディクラフトの生産体制を見直すことも今必要なのかもしれません。また、マケレレ大学との海外ＦＷの際、女性コーヒー農家さんのみを優遇する政策は男性の反感を買うのではないかとの指摘もあり、ジェンダー平等達成の難しさを改めて考えさせられました。

エコツーリズム班ですが、現地サイドとのコミュニケーションが一番とりづらい中、本当によく頑張って、パンフレットを完成させたことに、お褒めのお言葉をいただきました。JICA ウガンダ事務所に置かせていただく可能性も出てきて、活動をした甲斐がありました。ただし、もう少し、現地 NGO が何を伝えたいのか、また、日本だったらどのような人にウガンダのマバンバ湿地を観光で訪れてもらえるのか、つまり、このような湿地で野鳥観測をする意欲のある人は現地に何を求めているのか、についても調査をすべきだったのではないか、との有難い指摘がありました。

なお、当初予定していた 4 名のコメンテーターの他に、株式会社 JIN からさらに 2 名、そして、JICA からも他に 3 名の職員の方々にもご参加いただきました。本分野の専門家に多数お集まりいただいて、ゼミ生が行ってきた活動成果を報告でき、かつ、それに対する忌憚のないコメントをいただけたこと、本当に良かったなと思います。

今年度もまた、実際に海外に渡航ができませんでしたが、これまで現地で築いてきた繋がりを最大限活かし、オンラインでも今できることはすべて行うことができました。実際に現地に渡航しての海外 FW を完全に代替するものではないですが、新たな海外 FW の可能性を今年も見出すことができたオンライン海外 FW であったと思います。

文責：政策学部教員　岡本由美子

補足

2022 年 9 月 7 日（水）から 9 月 9 日（金）までのオンライン海外 FW の日程表

日付	曜日	地域	ウガンダにおける訪問機関	相手機関参加者リスト
9月7日	水	首都カンパラ	JICAウガンダ事務所　10:00am ～	所長、所員（2名）
	水	ムバレ（東部ウガンダ）	ブフンボ小規模有機農家組合（BOFA）	GM、女性コーヒー農家4名
9月8日	木	首都カンパラ	マケレレ大学開発学部	新旧学部長（2名）
	木	ワキソ（カンパラ近郊）	マバンバ湿地エコツーリズム協会（MWETA）	会長を含め多数
9月9日	金	グル（北部ウガンダ）	北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト（NUFLIP）	ローカルスタッフ（３名）